

薄氷集



薄水集序

夫歌者我邦古之道而始諾冊二尊成素蓋鳴
尊調天地之氣感鬼神和人心至後世其分派頗
多矣寶居大人世事農商家政之餘注意翰墨
詠短歌其風流尤可愛也聞久米河邨者元弘
之古戰場而武野之舊蹟也昔者聖護院宮
遊乎此地詠一首曰佐登飛登乃久米久米賀輪
止伊婦具禮仁奈利那波美圖乃古保利古曾
勢免是其餘香之于今所存歟大人常與其徒
樂之出則探山水入則伴古人花之晨月之夕
其詠不可勝計是以撮摘其秀逸者緝為一卷
名曰薄水集蓋取古歌之意也稿成請序予感

其志遂序以招大方之嘔詆

明治十年歲次丁丑秋九月久米河學校

榎本貞義子正撰

久米河郵懷古

昔久米河鼓鞞地兩岸薄氷如刀摧陣營不知
何處在一片舊碑封青苔官軍功名壅竹帛忠
臣俠骨高崔嵬君不見芹苴之橋畔有大賈運輸
貿易芹苴為魁又不見道樂池中竒觀車群蛙戰
爭留往來往來如織鎌倉道今日農夫荷鋤旋
嘗聞桑田變為海戰場今化為桑田舊墳空存
狹山上元弘以來確不遷嗚呼盛衰有時否有
變化又有依然

幹齋 榎本貞義

武荒國多廢入向あ都の境一河あり字三柳津川と云
源々狭山あり敷々各村の溪あり海岬々桑村あり又
一きあり其久保村の山裾より海々桑川と云る西河合流す
仍二三洲川の石あり此此川と一都と桑羽一と云る及
して今も其名跡ありと云る一弘の弘も此河平のりく
たむと云る一と云る其記も久米あり其後其四十八年の冬
西河院通身唯所迄東河の折あり此杖を立させらるる人の
桑桑川と云るあり其水の氷りてをせせと云る此れ一
此河の親族たりと云る一と云る其桑川は信々南あり其
ありとの成田山や歌句合を催し諸風あり此河を
乞ねりて建つる河つる事既にハ余事不及了と云る
四季より其東系の名家より此河を乞ねりて四季

合しと我をともあがなほせをくくを字をいんり子吟
 凡ありはその中らしよの光り了の白くも如き秀他
 あらうと送るふ者影とよびワリに徳冷を巻くつ
 極せんも世を哀しく給ハ一奴衆も所くくは深望くま
 送らんを守物ても冠身をもと儀しと白汝修業の始
 ありは初め乃奥維信の山極みまのりくは落らひ自中
 せとくはあは又妙なる柳塵一切成名遠く後厚く少
 集りて編みんとは都御堂の地ありしとよまをのり
 東武荏苒門の一派空をそ度六世の河々しこのる
 四拾十年の冬雨は野々八の老酒ありしなり

他物と連歌

乃奥維信のまの葉をその中らる

うまう水や葉よ川の夕日る色
 色りくまのまのゆの細月
 市原く葉のまの夜中
 若ふ葉くまの露しり
 何りもいよめ新曲のまら
 稽の候し免あそま
 ちんまは波の波きつゆ
 不つしと都も縁の化んは
 ちねあそぬまらちまを喰ま
 つもあそむの候るま

このる
 う学
 新山
 旭抱
 英維
 懸花
 表外
 中歌
 志探
 新利

新あいの若の才ぬる月代よ
おまの心を研ぎ研ぎ一光る
新若のまにかん一研ぎを修る
こゝのよの上の若を一よる
掛るす阿弥陀佛のよを
こゝの若をよる若をよる
ちゝのよの神をよるの人 通
お酒ひさく店ひさくを
娘せり一若れ柳の若れ
若れよつ若れよる若れ
民のため若れ若れよる
秋もよる若れ若れよる

赤岳 山井 一 生 有 柳 秀 峰 八 四 五 象 丁

因又の二若れ若れ 水りか
こゝの若れ若れ若れ若れ
つも若れ若れ若れ若れ 若れ人
若れ若れ若れ若れ若れ 若れ
所々若れ若れの若れ若れ
洗濯りの若れ若れ若れ若れ
若れ若れ若れ若れ若れ 若れ月
若れ若れの若れ若れ若れ若れ
今若れ若れ若れ若れ若れ若れ
若れ若れの若れ若れ若れ若れ
若れの若れ若れ若れ若れ若れ
若れ若れ若れ若れ若れ若れ

一 若 五 清 月 若 更 山 若 柴 若 不 若 友 若 若 若

半嘆く物好林のうらり〜
みよらりと空をのらる朽 池
右一照
等 裁
止

三


月之本為山送

再考之部

人のりやあまも阿るり	いそがし	森	山
留吉のちやう〜いそがし	梅亦月	立	
け文ハ坊り〜	いそがし	一	望
梅りあや〜	いそがし	友	望
ふそ〜	いそがし	月	ヤホ
うそ〜	いそがし	精	仙
いそ〜	いそがし	山	
いそ〜	いそがし	一	章
いそ〜	いそがし	文	柳
いそ〜	いそがし	悠	雅
いそ〜	いそがし	雅	雅



武ノ岩屋
 白泉寺
 青雅
 花
 雲



玉川の水を狭山の影を映し、メクリタ
 さりしと柳のふりかへる春の鳥
 そのあまのうらみ吹りし春の風を詠由井
 系入の雪を鏡に納めし葦　　雪氷川　　一
 富　　林　　学　　山

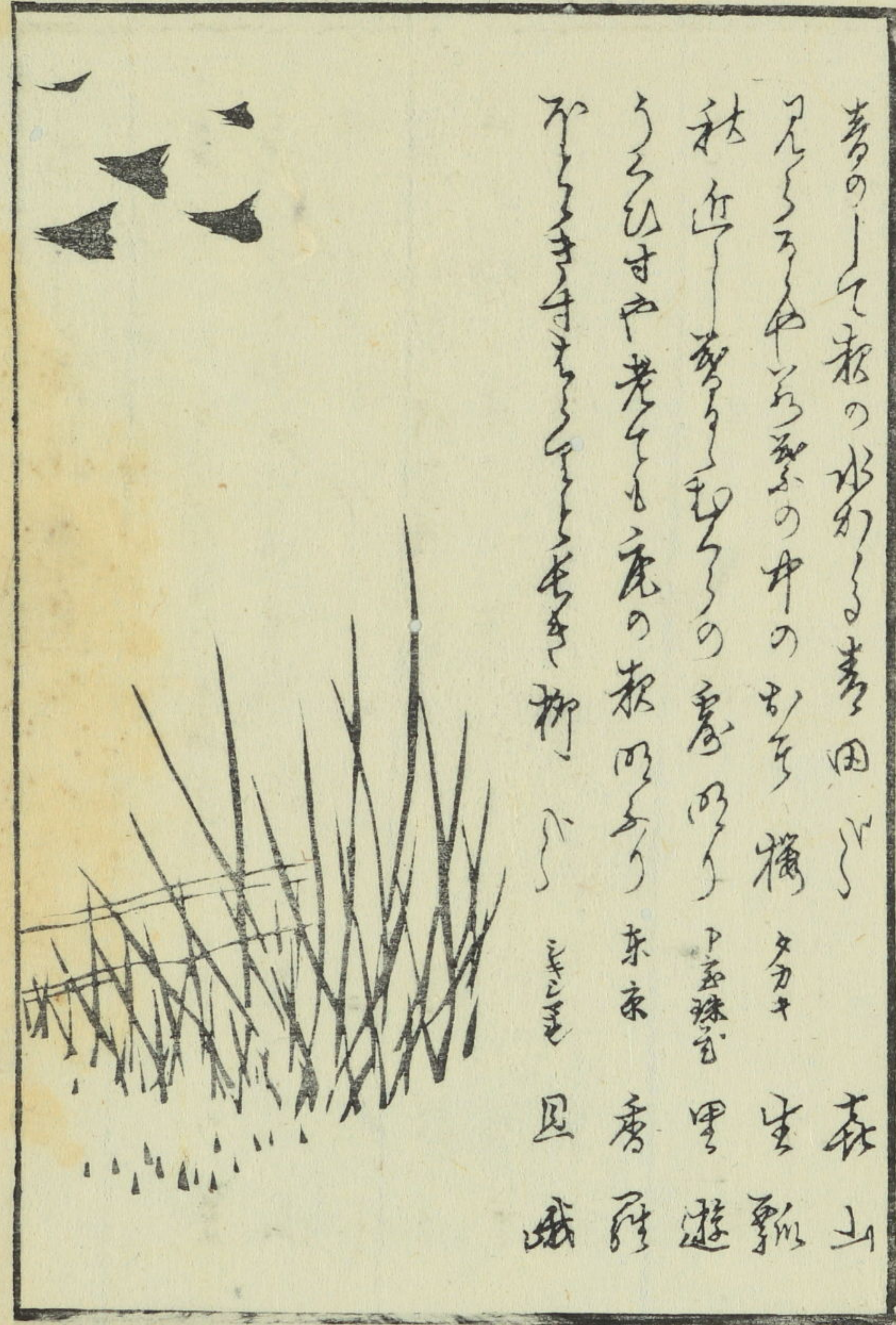
花
 雲

雪中 鹿橋年送

梅翁と部

在る不二の本の月よ白き四日なり夕暮
 夏の月よ雪降る風降る一秋酒下り
 年の子や初ハ片一と初もまじく羽
 家くくは思痛き降る月と我い合カ
 めー冷も夜の月初や夏の秋
 この年や伴とまじく一秋まじり名ス
 不もまじくあくやまけき水来下台
 まく一は中風ま一石の明をらひメタ
 さけ安き葉も白守るまじり
 六
 可翠
 久山
 好雪
 静峰
 可翠
 一白
 小形
 深云

春のしそ秋の水かゝる春田
 見くろく中を葉の中のおそ橋
 秋近し雪もくくくくの春のり
 うらむ甘や老もも鹿の秋のり
 不もまじりまじりまじり
 春 生 野 遊
 冬 秀 彦 遊
 思 哉



附の巻ノ下

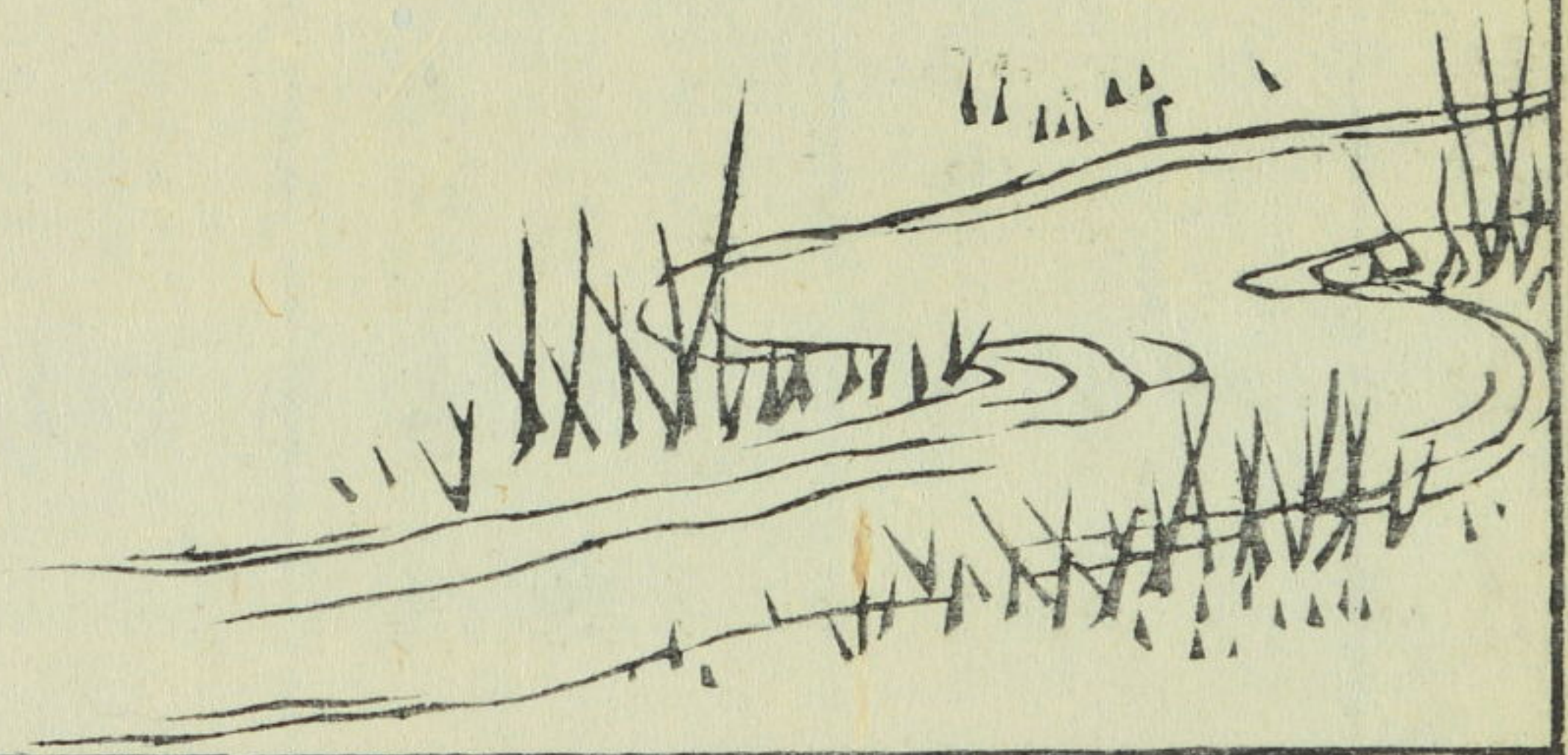
曉ゆらる

水鏡うれ

武青梅

奏風亭

柳丸



草庵電海遊

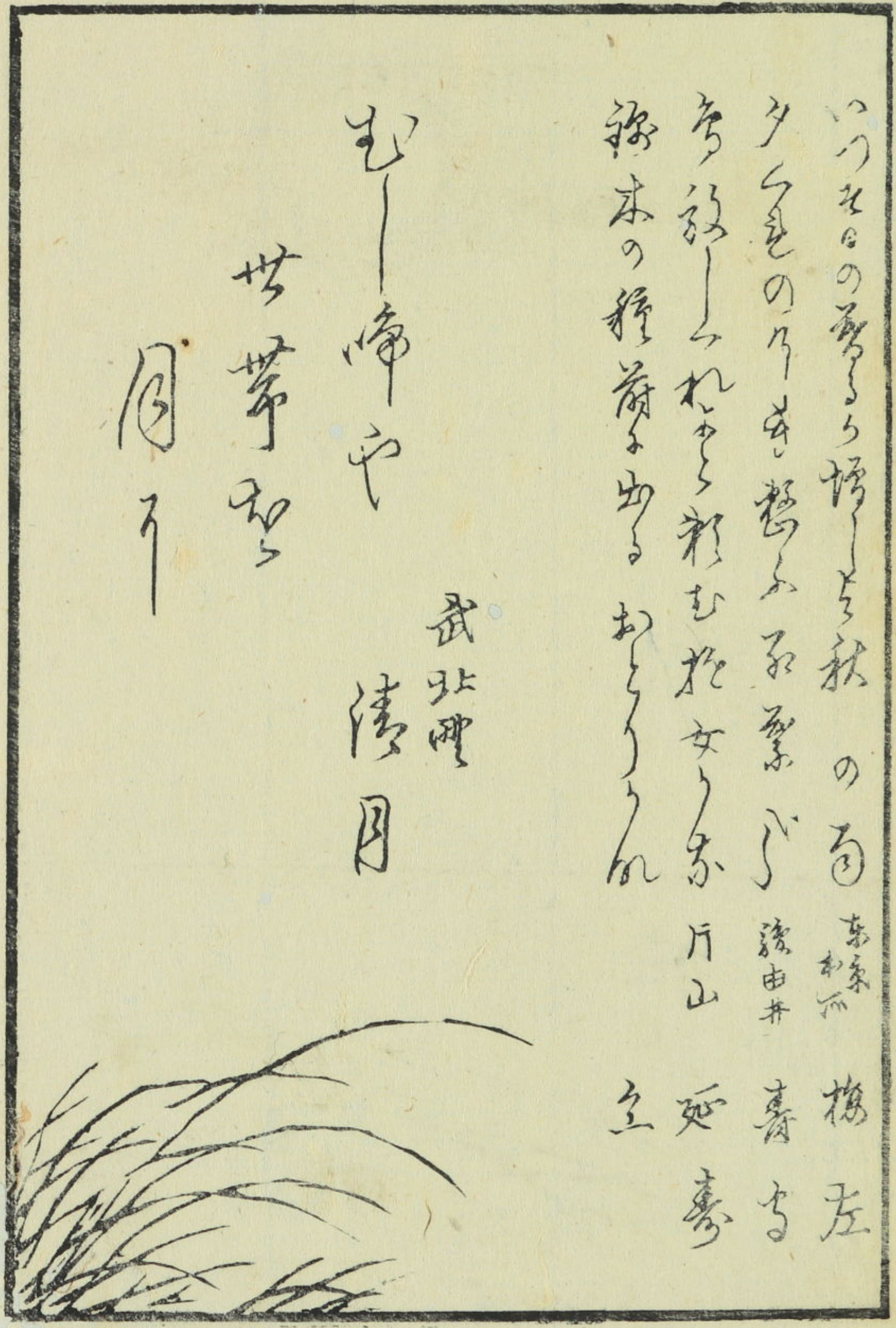
秀之丞之部

日よ于世なりけり乾くや秋の空
 蕨心の後所しりりる春の音 府中 英 久
 陰 稽止しそ宵あくるは源平の月 多 梅 五 峰
 舟を舟と居ても若き守性そを 芋 保 泉 伝
 蕎麦のむ川を横する 其 交 う れ 小 夕 一 井
 酒とてを味方 阿 多 け り 秋 の 夕 暮 如 意 村 妻 際
 薫 中 下 我 ありあり 啼 せ り 大 谷 本 山 寺 有
 相 比 せ ぬ 吟 一 あり 柳 う れ フ 中 山 井
 お ぼ せ ぬ 吟 せ かり 也 ぬ 多 保 芋 保 其 秀
 う ら くれ や 戸 の 下 け り 多 保 牛 湖 月

東系
若牛色



秋の
月



月の名はのちるるは秋の月
東条
 夕の色のりき想ふ不系井 遠由井
 夕の影しれをうねむ花女う糸片山
 縁木の程前よりおとくうの
 立 延 壽

むし啼や

武北碑

清月

世帯や

月

秋香の夜金羅遊

秋色の夜

波子月夜のいさねきりー浦子香キニ 湖香
 空の香半ハ忘るるをさるり 羞光
 秋中ひく秋香のこれハ伽中トシ 暮色
 玉露のほ上や露葉の香 塔り中カシ 暮色
 藤色を又何とくきききき山ノ子 静水
 空の香ハゆりゆりゆりゆりゆり 静水
 中結の空香をゆりゆりゆり 静水
 空の香ハゆりゆりゆりゆりゆり 静水
 空の香ハゆりゆりゆりゆりゆり 静水

六六

波子月夜のいさねきりー浦子香キニ 湖香
 空の香半ハ忘るるをさるり 羞光
 秋中ひく秋香のこれハ伽中トシ 暮色
 玉露のほ上や露葉の香 塔り中カシ 暮色
 藤色を又何とくきききき山ノ子 静水
 空の香ハゆりゆりゆりゆりゆり 静水
 中結の空香をゆりゆりゆり 静水
 空の香ハゆりゆりゆりゆりゆり 静水
 空の香ハゆりゆりゆりゆりゆり 静水



きりぎりす

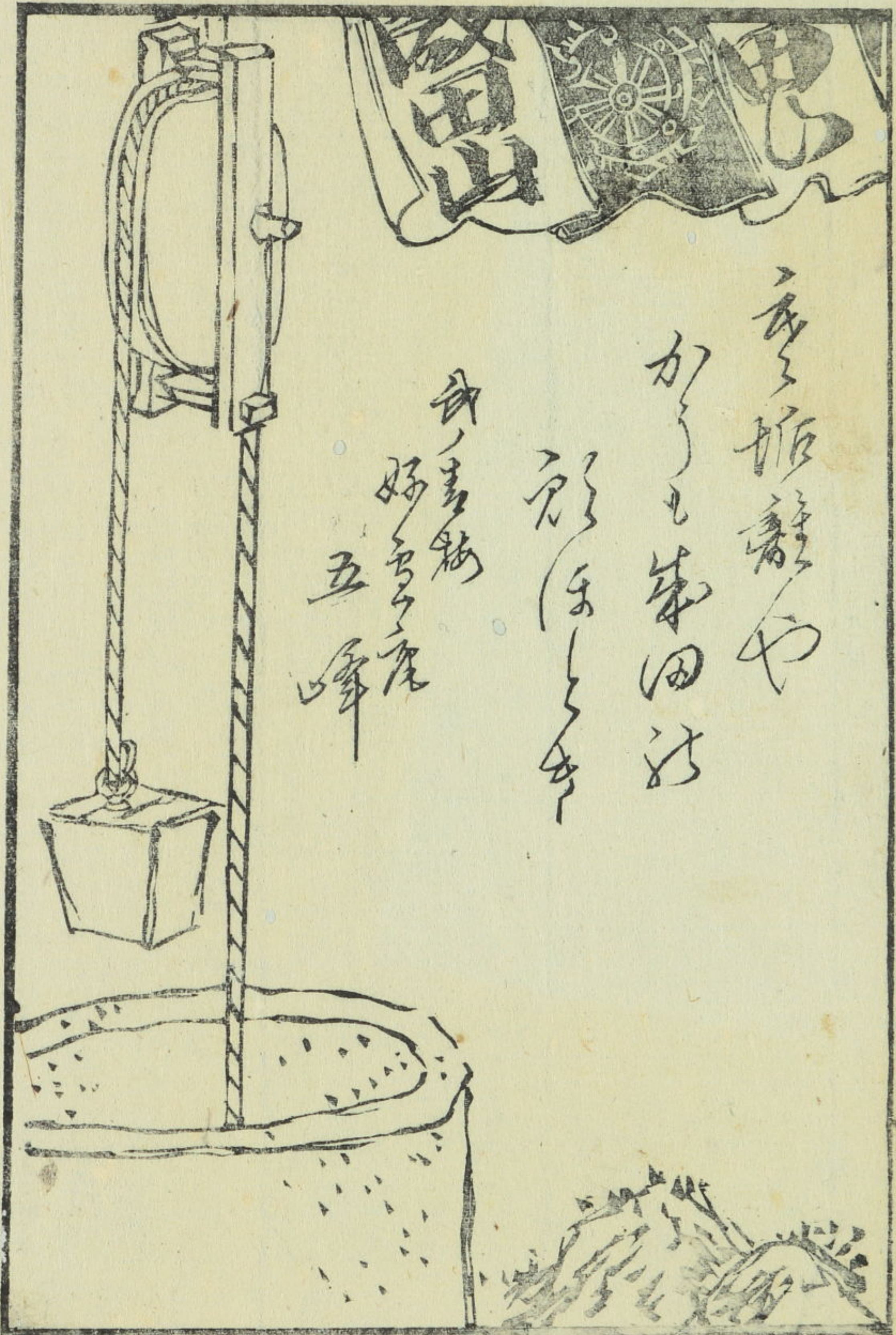
かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ



九

實を底のそと

きりぎりす

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ

かきくさ



茶のやや

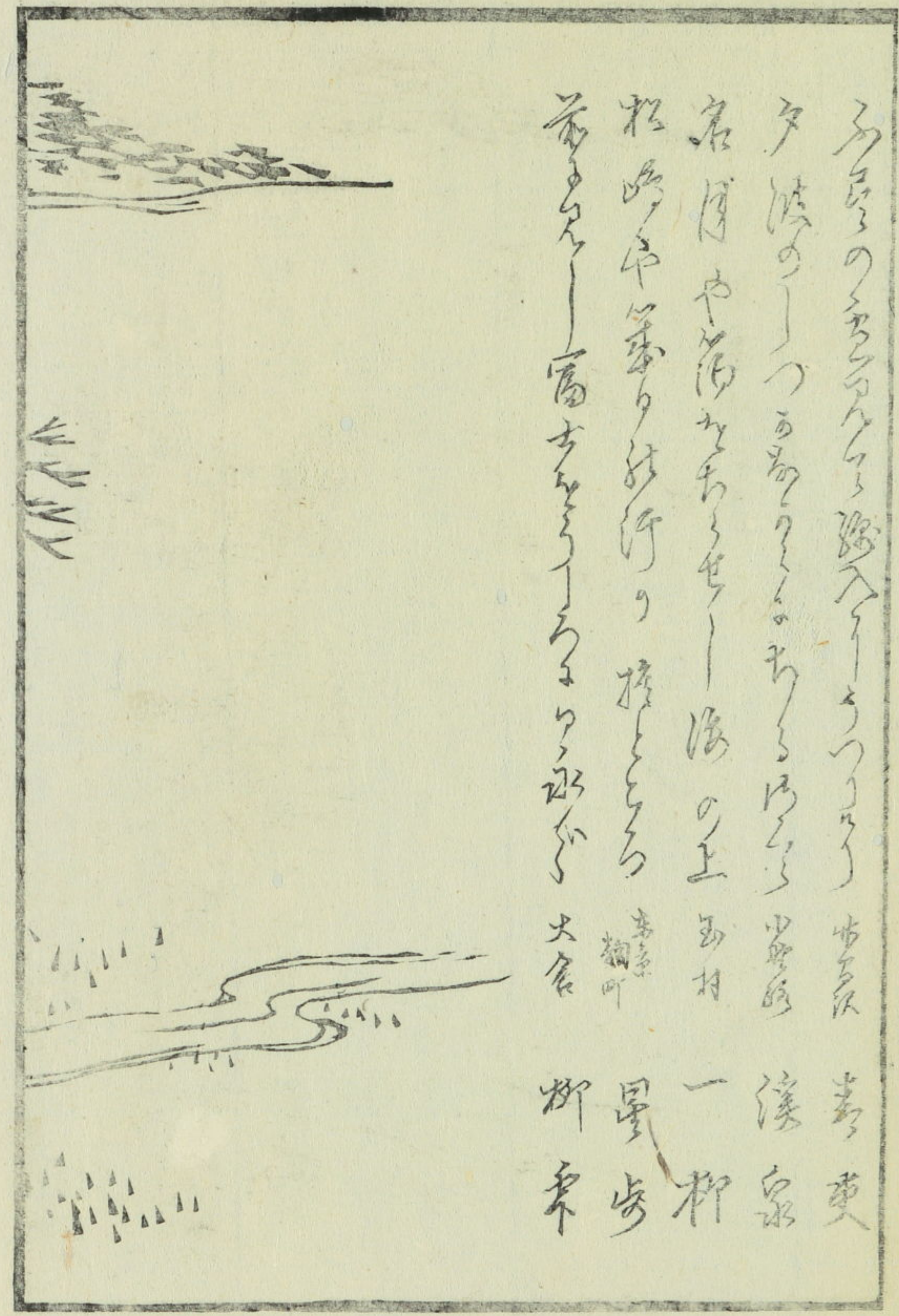
西江船ハ

水とこころ

茶のや

あつ

あつ



多良の... 入... 上... 村... 柳... 泉...
 名... 海... 上... 西... 村... 一... 柳...
 柳... 泉...

信增園等歌撰

新考十五

雲ノ也 雲ノも 雲ノも 山ノうけ
 秋もあつと云ふ 木立阿ノ時 冬
 月ノ一 雨ノ 雪ノ 春ノ 後 夏ノ
 秋ノ 冬ノ 山ノ 水ノ 花ノ 鳥ノ
 雲ノ 風ノ 雨ノ 雪ノ 霜ノ 露ノ
 霧ノ 靄ノ 煙ノ 霞ノ 雲ノ
 月ノ 日ノ 星ノ 雲ノ 霞ノ 霧ノ

萬曆十二年

雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ

雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ

大島 虎ノ 前遊

七

雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 雲ノの 雲ノ自 雲ノ
 雲ノも 秋ノ也 秋ノ也 秋ノの 雲ノ自 雲ノ

おぼえたる懐くものきりし 猫のふら
老いしをよも 老も 老も 閑る 閑る
大空の 孤の 月影や 春先の 影

柳 雛
老 雛
老 雛

其 墨 彦 東 岳 道
おんきりし 山 道 歩む 山 道 歩む
其 墨 彦 東 岳 道

悠 雛
の 雛

七ヶヶヶヶ
松外に 果多き 世ありきりし
情 懐 也 向く 老く 一 沙の 後
老 あり ぬ 山 あり づの づの 山 あり
那 の 多し 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏

森 山
生 雛
森 山
山 雛

形を 咲 花 多し 角 田 の 一 山 あり
州 の 戸 や 様 一 堂 あり あり
草 あり 一 月 あり 山 あり あり あり
神 あり 一 山 あり 山 あり あり あり
海 堀 や ま ち 白 雲 の 片 あり
能 多 あり 一 山 あり 山 あり あり あり
大 あり 一 山 あり 山 あり あり あり
老 あり 一 山 あり 山 あり あり あり

の 雛
老 雛
老 雛
老 雛
老 雛
老 雛
老 雛
老 雛

形 あり 一 山 あり 山 あり あり あり

の 雛

おし編て片羽のまき目白か
 箕了斗も知ま下りり移 森
 等もまふ而も友あー降る 山平
 よー柳や空蛇 甲ハ 網うせき
 膝枕や人を道ーし元の家
 雨降やひらひの橋の下さけり
 赤らまら中出逢入ーけきとまら
 雲うらまも志うそ船さふあう風 白メ
 雲の先跡さき梅さーしをさうー 赤糸
 大糸やりの返あさう秋の蝶
 月花も住すさ虎やまゆりさ
 山、流、やまのまを知ぬ所の夏

山井
 森山
 山平
 英磯
 一 要
 英維
 湖月
 碧流
 一の
 の学

娘 やうも海さう秋あさうら川さう
 夢の深や晴さく人を移さ立
 葉も圓森山道

森 録
 森 山

十のうら

夢さあさう晴けし語ぬ養の鳥
 雲跡跡をさう流いあらぬ 春う風
 梅咲色甲斐さう根さ立 山のさ
 志秋中へ来ぬりのらー色さぬ 雲う
 何のま地をささきーるの葉地さ
 赤流や霧もむさきさ 移ささぬ
 晴うやさうまのなまーさぬ 高海、
 足あまらう 乃もわさう 物 野のま 高村 さつぬ

可 学
 泉 信
 英 維
 志 弁
 一 学
 静 崎
 英 雄
 の 水

閑花遷居巻之三 終の篇

佳境園等裁送

可きもの形も河くま雲 佛
此は遠く出まひゆきあり松のま
小舟のやい橋の影の河にくと
町をよ詰ひらめきて夕の始
松船や君ひく了しをゆつ入つ
竹舟のしんきく橋よりきん
空あきく尾の巻送
雨のし小網の釣る小舟は
松の舟の物しを結をくしり

而 洗

折 籠

貨 籠

雲 山

英 籠

山 井

この 衆

悠 籠

折 籠

新 吟

廣 木

英 籠

美 更

旭 抱

八 五

六 車

一 富

松船や松のつーのしん通り
舟の尾やる雲ふんのうらまき
空は雲尾東巻送
風形くまひくまんの煙くか
美舟や橋の影の河にくと
上は小舟の後何と問もり
可き物折送
るものし様まひし 舟

○ 社をひきききけあり中松り松
松をくくし月のさし色ひきり
松をくくし月のさし色ひきり

福壽の伊吹のけり
 流を流す流塵ふまゝるる
 本をゆく時のさびきくら古井ふ
 根よあらぬるの古樹や梢の影
 年わつた形をなかりや極を極
 老ささるや千代たつきせぬ松の影
 高き高の素あつても是せぬ鏡うれ
 海にや中庭の手利を不ぬる母
 影の多し少のつらつ流きくら
 樹を流す松と成りては心
 山を流す松と成りては心
 若井の流す松と成りては心

壺 泉
 角 丈
 一 養
 一 養
 三 好
 梅 我
 一 月
 一 山
 而 洗
 左 里

若多の果地らぬりのふを流す
 流すふを流す流す流すの水
 初雪や流す流す水の水
 梅咲や流す流す水の水
 早川も流す流す水の水
 西津や流す流す水の水
 入る所の流す流す水の水
 影の角流す流す水の水
 ぬき流す流す流す水の水
 五ふた流す流す流す水の水
 吹風も流す流す流す水の水

一 女
 一 月
 一 山
 一 洗
 一 而
 一 左
 一 里
 一 壺
 一 泉
 一 角
 一 丈
 一 養
 一 養
 一 好
 一 梅
 一 我
 一 月
 一 山
 一 而
 一 洗
 一 左
 一 里

けふ多行神やりのきん 雲をら
 地の家や夏盤あきと 納め都
 所あくやるをふくく 一都の鐘
 客を交り 雲をら 福をら
 雲の浮きも やる水あ なる山
 雲のあふ山をらら 関ふとら
 雲や 雲をら 雲をら 降
 新のあて月の教わく 田画く
 ひくく 恒の家とふ なる夜うし
 雲をら 大盤ふの 氷く 氷
 雲をら 狭山く 池の 雲をら

梅 菜 英 蘇 外 利 瓢 生 一 生 一 雲 雲 旭 旭 雲 雲 山 井

何をら 何をら 何をら 夕曇り
 雲をら 入るくくく 雲の 雲上る
 雲をら 雲をら 雲の 雲の 雲
 雲をら 雲をら 雲をら 雲をら 丹
 夕曇り 雲をら 雲をら 雲をら 雲
 雲をら 雲をら 雲をら 雲をら 先
 雲をら 雲をら 雲をら 雲をら 雲
 雲をら 雲をら 雲をら 雲をら 雲
 雲をら 雲をら 雲をら 雲をら 雲
 雲をら 雲をら 雲をら 雲をら 雲

千 柳 雲 雲 雲 雲 雲 雲 雲 雲 雲 雲

新出の茶の味

はくも

り

十九

